
プログラムコード-Utopia fantasy-

残月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プログラムコード - U t o p i a f a n t a s y -

【Nコード】

N 7 9 2 4 T

【作者名】

残月

【あらすじ】

主人公の折月彰二が体験する不思議なSF学園ストーリー。

『これは現実なのか・・・それとも』

彰二はあるきっかけでタイムウェーブ0理論の噂を耳にする。

それは現代物理学の崩壊の序曲だった。

プログラムコード・error

駒澤オリンピック公園のど真ん中に大学を建てる計画が実行されてから五年になる。

そのせいで俺は小学一年生から中学1年まで行つてた東京ラーメンショーが開催されなくなつて、毎年、何処かでラーメンショーやらねーかなーとか思つてたりするが、その気配は全くなし。

駒澤オリンピック公園のど真ん中に大学建てるとか言つた野郎は国に圧力をかけたらしいが、そんなことはどーでもいい。

俺は全国の色取り取りのラーメンが食いたい。ただそれだけだ。

そついう、俺は今年から大学生だ。もちろん、その大学だ。

何が専行だつて？何故そこに入ろうとしたかつて？

医学専行大学だ。

なんでも脳、身体の情報を提供するだけで学費がただらしい。おまけに医者免許全般の受講資格が貰えると言う最高級のジングスカンのような特典付きだ。

なんかうさん臭いつて？勿論それは俺も承知の上だ。学費がただだつてだけで入学した奴も多いくらいだしな。今年の春から募集をかけてるらしいが、脳や身体を弄られるとなると、危険度Maxさんで余程のアホかキチガイしか集まらない。

情報提供は毎週金曜日の一曰、脳、身体の定期メンテナンスで一日が終わる。授業は通信制で請求した資料が毎月七日に一カ月分来る、その他、月曜日、火曜日、水曜日の午前中の講義に出席すれば試験パスで単位が貰えるというこの素晴らしさ。

話は戻るが、この大学の学生のみに与えられた権利がある。

大学の敷地内で学生のみで行われる全国ラーメンショーさ。三か月間ごと三日間行われ、一杯200円という、お持ち帰りも可能なこの安さはお買い得商品の一つだ。

そつ、これが駒沢桜道公園大学だ。何故かこの大学は裏の名前が存

在する。通称『ヴァルハラ大学』。

なんかインチキ臭い悪の組織みたいな感じがするが、学生の間で噂になり、それが北欧神話から着いてきたらしいがそれを知ったのはずつと後の事だ。

園長様が北欧神話好きでどーたらこーたらで、ヴァルハラらしい。ヴァルハラは北欧神話における主神オーディンの宮殿で。古ノルド語ではヴァルホル、戦死者の館という事だ。北欧では、死者は聖なる山で生き続けるという民間信仰があるが、そんなこっちゃ知った事はない。

ラーメンと医学免許が取ればそれでいい。今は就職難だからな。医者不足も底を突きぬけて、世間は医者欲しがってるこのご時世だ。まったくもって嫌な時代だ。

で、新学期早々、クラス分けの張り紙を見ると、いきなり声を掛けられた。

『よっ！我が相棒、シヨウ様ではないか！！なんという事だ、またしても大学でゼミが一緒とは驚きだぜ！今年こそは我がバンドの「ライス&バター」に入って貰うぜ！！丁度ベースが空いてるんだ！この際、バンドデビューは如何かな？』

俺は折月彰二、略してシヨウ。

コイツは若柴音瀬。高校時代からの付き合いだ。俺はこいつは音瀬を略して『オト』と呼んでいる。ぱつと見はイケメン男子のようだが性格が捻くれてるといふか変わった野郎だから、俺と同じく年齢ニ彼女歴nothingだ。

高校時代からライス&バターとか如何にも馬鹿らしいバンドを組んでるんだが、奴のギターの演奏は神がかっている。だが、ドラム仲間がいるだけで、ボーカル、ベース担当はいない。

なんでも相応しくない奴は切り捨てといふか、募集すらかけてないことごとく、俺をバンド勧誘してくる腐れ縁だ。

『だが、断る。つか、この調子だとバンドの活動は最近上手くいつ

てなさそうだな…。変なネーミングのせいでメンツが足りないんじゃないか？いつその事バンド名を変えたらどうだ？』

俺は無粋な返答を返したが、『またかよ。ちなみにライスとバターの組み合わせこそが旨さの元で、それこそが神クラス』とか言つて颯爽と校舎の中に入つて行つた。

奴は何を考へてるやら想像も付かないくらい想像を逸している。奴のことだからバンド勧誘もしくはナンパでもするものだろうと言うのは承知の上の事だ。そして、桜が散るように華麗に散つて行くのだ、さらば、友よ、お前の事は決して忘れない。

現在時刻は8時半弱。どうやら下見をしなかったのが大本の大失敗だったらしい。

家はボロアパートに独りで下宿してるわけだが、たまにオトが泊りに来る事もあつて睡眠不足の真つ最中だ。実家は新潟にあるんだが、親父とお袋は仕事が忙しくて、こっちに来ようも来られない状況下にある。

まあ学費がただだから両親もそんなに頑張らなくて良い訳だが。

まあ何と言つか俺もオトも楽天的な性格だから、こんな大学に進学しようと思つたのだ。

とりま、俺は学園生活を満喫するためのスタートラインを今まさに切ろうとしているのだが。

話しに戻るとアパートから家まで自転車で15分ほど。徒歩で20分程度。

しかし、愛用のマウンテンバイクで5分で到着するとは予想外だった。

流石、我が相棒マウンテンバイク、グッジョブ！！

マウンテンバイクの大活躍に想いを耽つて、校内の中庭の芝生に座つて時間を潰すかと、思つた矢先、向こうの並木通りの真ん中に少女が立っていた。

『おい、その人、車が通るか…』

アレ…、どういう事だ。その顔に見覚えがあった。ツインテールの眼鏡、俺の身体がぐにやぐにやと歪む。景色がモノクロに。人、車が消えた。どうということだ、これ。ついに神からのお告げで天国逝きか？

その少女は俺に向かって一直線で歩いてくる。人も車もない殺風景な風景の中で、ゆっくり近づいてくる。俺は金縛りにでもあったように指から足の先まで動かない。

これなんて死亡フラグ！？少女は俺を見て歩いている。とてもゆっくりとしたペースで。

その一秒がとても長かった。時間が止まったのが分からないがこれが事象の地平面なら1が0.1に00.1が000.1に000.1に000.1が0000.1に、次の一秒はいつやってくる？

ついに少女は俺の顔面まで来ちまいやがった。取りだすのはナイフか！？銃か！？怖いを通り越して恐ろしいぞ、これ。

その時いきなり世界が真っ白な空間に包まれた。

何もないセカイ。可視光で出来たスペクトル上の空間、エネルギー保存則が成り立たないホワイトホールの閉鎖空間と呼ぶべきか。

顔面すれすれで止まり、彼女は何もせずこう言いやがった。

『このままで良いの？貴方はとても希少価値がある人間の一人。そう、貴方みたいなイレギュラーは世界に一人しかない。忘れないで、私は貴方の守護者、タイムウェーブ零理論、これキーワード、2012年の冬、現代物理学そのものが崩壊する。だから私が来た。また。会う時まで』

彼女は俺に背を向け遠ざかって行く。俺は安堵する余裕もなく、ただ動けない身体を動かそうとしてもぴくとも動かない、どうなったんのか分からないぜ、まったく。これを論文にしたら間違いなく受賞ものだぞ。まあ仮説がないから出来ないけれど。つか、タイムウェーブなんちゃらって何だ！？物理法則の崩壊！？なんじゃそれえええええ！！

まったくもって意味不明である。というか理解不能！？

そんなくだらないことを考えていると、分からないが体感主観で言うとその少女が薄々と遠ざかっていく度に色鮮やかなセカイが戻ってくる。これは少女が遠ざかる度に起こるドップラー効果の影響なのか、ゆっくりと現実が色づき始めた。

感覚と景色が元に戻った時にはその時にはその少女はいなかった。

ホワイトホール空間も存在しないし少女もいない、人も車も存在する在り来たりな日常の朝。普通、当たり前。

とつさにデジタル式の腕時計を見たが時間は八時弱きっかりだった。デジャブなのかと自分でも摩訶不思議に思うが、冷静に考えればそんな現実離れな事は起こらないとこの時は確信したんだ。あくまでこの時はな。

気色悪い幻覚を見たせいで芝生に座って時間を潰すと計画はもうすっかり潰した蚊のような状態で計画は断念するしかない思った。

しかしまあ、四月で24度の陽気とは随分な余計な事を通り越して異常気象も程ほどだ、きつと神様とやらは人々を暑さで苦しめてるドS野郎に間違いない。いや、きつとそうだ。

プログラムコード・error(2)

『助けて、助けて、助けて』

誰かが俺を呼んでいる。ここはどこだ。星が見える。青い地球、月、その他の惑星。

今、確かに把握したぜ、どうやら俺は宇宙空間にいるらしいが、これは夢だろ。

夢なら早く覚めてくれ、と願うがこの夢は俺の意思に反しているらしい。

目の前、あるのは光さえも通り抜けられない巨大なブラックホール、
どどん近付いてくる。

『助けて、助けて、助けて』

その声はブラックホールの空間のある領域を取り囲む膜の内側から聴こえる。

そのブラックホールは俺の身体をぐにやりと歪め、非ユークリッド幾何学のように平行線公準が成り立たないエントロピーのようなものだ。

『助けて！！！！！！！』

その叫び声で一気に俺はブラックホールに吸い込まれ拡散した。

ぴーひびぴー！　　ぴーひびぴー！　　ぴーひびぴー！

俺は携帯の電話のメールで目が覚めた。メールを見るとやはり『オト』だった。

『今日のゼミのメンバーで初の打ち上げ会をするから来い。場所は新宿のカラオケの鉄人新宿大ガード店に20時集合だ！それと、お前と話してた読書好きの子女いるだろ？そっちは任せた。』

何が初の打ち上げ会だ、俺はジャングルのナマケモノのようにマイペースで今夜を過ごそうと思っていたのだ。

えっと、現在時刻は19時じゃねえか。幾らなんでも急すぎるぞ、

オトよ、お前の勧誘センスは伊達じゃないぜ、そこに痺れる、憧れはしないがな。

とりま、先ほど、夏子さんに要件を伝えると『分かった。』の一言だった。年頃の女の子なんだから、もうちょっと飾り気があってもいいんじゃないか、おい。

8時45分、電車を乗り継ぎ、例のカラオケ店までやってきのだ。走ったせいか息切れ寸前でいかにも俺はカッコ悪い。

確かゼミは俺とオトと夏子さんを含め残り三人だったな。

一体何をやらかそうとしている、オト。

5分前になると夏子さんが来た。

『連絡どうも。』

おいおい、それだけかよ、しばらく無言の均衡状態だったが、8時ジャストになるとオトと三人のメンバーを連れてやってきた。オトは俺の耳に囁きやがった。

『おい、お前は彼女と何してやがった。まさかと思うが…』

俺はオトの会話を無視してこう言つてのけた。

『ついさっき合流して、待ってただけだよ、ね、夏子さん』

俺は夏子さんに話を振った。

『そう。私は彰二君と待つてただけ』

オトと一人の男と二人の女と話しはじめた。それから俺にこう告げた。

『それより中入ろうぜ、カラオケ三時間予約してあるんだ』

ふと疑問があった。

『料金はいくらだ』

奴は爽快にこう言つてのけた。

『ドリンクフリーで3000円だ』

俺はとっさに財布を開いた。2500円。昨日、食材を買ったまま

金を下ろすのを忘れていたのだ。

『残念ながら今、俺は2500円しか持ってない、500円貸せ』
と言ったら、オトは連絡ミスだとか言って奢ってもらう事になった。
こつ見えてオトは、新宿の高級マンションに住んでいるセレブなの
だ。

なんでこんなアホが金持ちなんだ。世の中は実にビリヤードの玉の
連鎖のようにの理不尽である。まあ俺はこんな日常をそれなりに謳
歌しようとしている訳だがな。

カラオケに入るなり早速オトは歌いだした、何やらオトは誰も知り
そうにないインディーズの曲をノリノリで歌っている。聴いた事も
見た事も無い曲を聞いているその他メンバーは呆気にと取られてる。
歌は上手いんだが、意味不明なラップ調の曲はこの場を盛り上げる
所かこの空間を破局させてるぞ。

他の三人は最近のJ・POPを普通に歌っている。これこそが一般
人だろう。

俺は一昔前の昭和の曲を歌ったが、皆はノリアクション。そうさ、
俺は昭和人間なのさ。自慢できるほど上手くはないがな。少なくとも
誰も知らんインディーズの曲を歌うオトよりはマシ。

最後に夏子さんのターンなのだが、有名な女性シンガーソングライ
ターの曲をまるで本人が歌っているように上手いのだ。後から聞い
た話じゃ彼女は一回もカラオケは行った事はないらしい。

これほどの上手さは、俺を含めその他の奴らを世界観に引き込まれ
た。

だが、残酷なことに「時間」というのは「現在」がひっきりなしに
アップデートしていくため、時は着実に流れている。それが俺たち
が観測する未来であって、過去は幾つもの思い出となり積み重なっ
て行く。過去は確定したものである。

いきなり、オトが立ちあがった。

『バンドをやるう。バンド名はユートピア ヴァルキリー』

それが全ての始まりだった。時間について深く考察しない限り悲願の統一理論が開く事はない。アインシュタインの特殊相対性理論によると、どの出来ごとが同時に起きているか。観測者がどれだけ速く動いているかによって時間変動は起こる。

それを知ったのは数年後の未来だった。ほんの些細な出来事によって未来の出来事が大きく変わる。それがバタフライ効果。

チーム ザ ユートピア ヴァルキリー

事はあつという間に過ぎ、家に帰ってきたのが0時を回っていた。オトの野郎が何とあるうことが夏子さんをボーカルに勧誘してしまったのである。オトの事だから、絶対セクハラまがいの事をするに違いないと思い、俺もその『ユートピア ヴァルキリー』の一人のメンバーに入ってしまった。

なんでも『ユートピア』は日本語読みで『理想郷』、ヴァルキリーとはたまに聞く言葉であるが、意味は知らない。で、早速グーグル先生のお出ましだ。

『えつとヴァルキリーつと、あつたあつた』

「戦場において死を定め、勝敗を決する女性的存在である。彼女たちは王侯や勇士を選び分け、ヴァルハラへ迎え入れて彼らをもてなす役割を担ったが、これは尚武を旨とするヴァイキングの思想を反映したものと考えられる。」

日本語として定着した「ワルキューレ」は、Walk?re のドイツ語での発音「ヴァルキューレ」に由来する。北欧神話の原語である古ノルド語では、単数形が *valkyrja* (ヴァルキュリア、ヴァルキュリヤ)、複数形は *valkyrjur* で、語義は *valr* (戦場で横たわる死体) と *kj?sa* (選ぶ) を合わせたもので、「戦死者を選ぶ女」を意味する。英語では *valkyrie* という。^{キリー}

なんかよくわかんねーけど、北欧神話のワルキューレの英語読みらしい。いかにも廚二病丸出しでお疲れさんだ。とりあえず俺はパソコンを切った。最近続いた過度の睡眠不足で身体もメルトダウンしかけていつ爆発してもおかしくない状況だ。Oh

My God、とりあえず俺を寝かせてくれ。ベッドに倒れ、俺

の意識はシャットダウンした。

ピーぴびび！　ピーぴびび！　ピーぴびび！

目覚まし時計の音が部屋に響く。手探りで目覚まし時計を確認すると、朝の8時だ。幸いなことに、今日は木曜日＝休日だ。今頃は学生やOLやらサラリーマンが忙しくなく、通学や出勤をしてるとなると、何か得した気分がある。

今日は13時からオトが提案して「定例会議」とやらを実行しているらしい。場所は駒沢にある俺らが高校時代からいつも利用している【美味しいコーヒーの喫茶店】という一風変わった昭和の香りがするドリンクバー付きの Pasta 系の喫茶店である。

そこで、俺とオトと夏子さん、それとオトのバンド仲間のドラマーの方が来ると言う。

急いで朝飯を書き込んで、日課のサイクリングと筋トレをしていたら、あつという間に11時、早々と筋トレでかいた汗を流して、レツツゴーだ。正直、俺はバンドなんてやるつもりもないしやりたくない。だが、夏子さんが関わるなら話は別だ。

男どもの集団に一人女子が混じるとなると厄介事が起きると違いな位と思ひ、俺は洪々メンバーに加わる事になったのだ。

20分前には来たはずだが、そこにはスーッ姿で黒い帽子を被った30代のくらいのおっさんが立っていた。こいつは店の前に呆然に立ち尽くし、煙草を吸っている。

ポイツ

火のついた煙草を投げた。なんて非常識な野郎だ。

『おい、そこのお前、オトの仲間か？』

どうやら、こいつが噂のドラマーらしい。オトはよくこんなおっさ

んと何処で知り合っただんだか。

『はいっ、そうです。オトの親友の折月彰二です。』

『聞いていると思うが、俺はドラム担当の緒方徹郎』

つか、オトよ、重要な事はあらかじめ伝えておくべきだろう。これでも三年の腐れ縁だ。ドラマーの紹介なんて一分もかからないぞ。

男はまた煙草を取り出し、火を付け、吸い始めた。

『楽器は？』

いきなり楽器は？とか意味不明すぎていきなりの質問に俺はたじたじだ天変地異が起きても俺は保証しないからな、こら

『だから、楽器は何が出来るかかって聞いているだよ』

今、把握しぞ。そういう事か。

『一応、ベース担当ですが、ベース経験はなしです。』

徹郎は鼻で笑うように、ふーん、ド素人か。と呟いていた。

『他に出来る楽器は？後、一々堅苦しい敬語は止める。気色悪い。』
慣れ慣れしすぎるぞ、このおっさん。なあなあ、年配の人に敬語は常考かと思っていた俺はどうなんだ。

『過去にバイオリンを少しかじった程度にやってただけで、とある事情で今は弾けないんですよ。』

実は俺は隠している事がある。俺は幼稚園に上がった時からバイオリンのレッスンに通い、中学時代は動画投稿サイトに覆面バイオリンストと呼ばれ、神扱いされていたのだ。

しかし、高校に上がった時、自転車で交通事故にあって左指に後遺症を残し、バイオリンの弦が不十分に押さえられなくなってしまうのだ。その時から動画投稿サイトに投稿も止め、50万で買ってもらったバイオリンを売り払い、楽器とは無縁の存在にいる。

『野暮な質問してすまなかったな。』

俺は、いえいえ、と言ってなど胡麻化した。今は指の後遺症は前よりは良くなりバイオリンを弾けるかもしれないが、逆に正直弾けない自分に落胆するのが怖いのだ。

しばらくすると、夏子さんが来て、10分遅れでオトがやってきた。

そこに徹郎が突っ込んだ。

『おい、どういう事だ、10分遅れで間抜け面で登場とは一体どういうことだ、コラ』

徹郎がオトの襟首を掴み、怒鳴っている。

『ええーと、ちよつと私用で、あはははは。』

多分、徹郎とオトは20分前に来る約束でもしていたに違いない。そうだ、きっとそういう事だろう。

『おめえが最後に来たからには、全員分奢りな』
オト乙。

『そっちの譲ちゃんがボーカルか？』

いつもと変わらない無表情で、『そう』の一言だった。

夏子さん、そこは突っ込む所ですよ（汗

『とりあえず、皆さま方、中に入りましょうよ、ここでは店の邪魔になりますし』

オト、お前の敬語初めて聞いたぞ。つか、ここは爆笑もんだぞ。きつと徹郎とオトの関係はこういうモノなのだろう。

中に入ると、平日なのか、若干、客の数が少ない。パソコンを必死で打ってるOLやサラリーマンの姿がちらほら目に付く。客の中には子供連れの主婦たちが雑談している様子も見受けられる。

『いらつしやいま…』

店員がしゃべり終わる前に徹郎がこう言い切った。

『四人、喫煙席』

店員は若干困った様子で、

『四名様、こちらの席へどうぞ』

つか、自分だけ煙草が吸えれば良いと思ってる徹郎は一度、天罰が下るべきだ。

オトはそんなの気にせずしゃべり始めた。

『これからユートピア ヴァルキリーの定例会議第一回を行う。まずは担当の楽器の割り振りから。』

いきなり過ぎだろとか思いつつ、話を聞いたとこ、

『俺はドラム。ちなみにオトはギターだ。』

徹郎がいきなり発言した。

『俺は…ええつと。』

考えてると徹郎がさらりと酷い事を言つてのけた。

『楽器が出来ないなら、近くでタンバリンでも振つてろ、悪い言いすぎた。』

まあ楽器が出来ないのは事実だがあまりにも直球過ぎるだろ、常識的に考えて。

即座に謝られるとこつちも気が引ける。

『まあまあ徹さん、彼はベース担当ですよ。俺がバツチリ指導しますんで』

徹さんとは徹郎の事で間違いないよな？

『オト、おい、待て。話が違うぞ、担当は例の楽器のはずだが。まさか、遅れてきたまでに忘れたとか抜かすなよ』

えっ…それって俺のバイオリン…。いつどこで情報が漏れた。情報源、ソースは何処だ？

『シヨウ、って訳で俺たちのバンドでバイオリンを役立させてもらう。俺は三年まえから気付いていたぞ、今もまだ残っている覆面バイオリニスト、それが折月彰二様だ』

やはりオトは音感センスは鋭い。多分、俺が着こなしてる服や癖のある演奏を見てそう思ったのだらう。

『シヨウの活躍次第ではこのバンドユートピア ヴァルキリーの管理権限を預けてもいいと思う。』

管理権限だあ？そんなめんどくさいものはいらん。金と時間をくれ。ところで夏子さんはマイペースで本を読みながら聞き流していたが一言放つたのだ。

『シヨウ君のバイオリン聴きたい。』

おいおい、夏子さんまでも奴らの毒電波に侵されつつあるんじゃないか？

オトはでかいバックから取り出したのはバイオリンだった。

『弾いてみ、シヨウ』

俺は軽くバイオリンのチューニングを済ませ、右手でゆっくりと弓を引く。

キイイイイイイ。

バイオリンは上手い具合に音が出る。左手でフラットの無い弦を押さえる。

指の後遺症はまだ残ってるが、ある程度は弾けそう。そう、一般人よりはな。

俺が弾くのはベートーベンバイオリン協奏曲第3楽章。

バイオリンの流れる音がゆっくりと時を刻む。まるで俺が世界の中にいるような、不思議な感覚。一人でバイオリンを弾いていた頃とは別物で、店の中の店員や客が釘付けになっている。俺は気付かない内に涙を流していた。バイオリンは俺の魂だ、それ以上も、以下もない。最後のフレーズを弾き終えると、この店に居る店員や客から拍手が贈られた。俺はこのバンドに入ってもいい。そこには音楽を通じて広がる仲間が俺に入る。ユートピア ヴァルキリーだったか？このヘンテコな名前も今の俺にとっての青春ラインかもしれない。

『よっ大将！やるじゃねえか。良い演奏だったぜ』

と徹さんが。

『流石、俺の見込んだバイオリニスト！今後の活躍頼むぜ！管理権限はお前にやる。どう使おうが勝手だ』

とオトが。

『素敵な演奏でした。』

と、いつもの飾り気のない夏子さんの発言。

とまあこれからスタジオ借りて初合わせしたいとこだが、俺は昼飯食べて解散だと思っていたため、全員はそんなに金は持ち合わせていない。オトも今日の全員分の奢りで資金不足。徹さんは金は貸さ

ない、の一点張り、夏子さんに限ってはそもそも1000円程度しかいつも持ち歩いてないという。

おいおい、皆様方、スタジオ行く気なら事前に知らせておくべきじゃないか？

なんだかんだで雑談モードに入り、くだらない世間話や、政治やこの町の都市伝説について熱い雑談で時間は過ぎてもう16時半だ。

『じゃまた明日定期メンテナンスで会おうぜ、シヨウ』
『シヨウ君、また明日』

とまあ俺たちはそれぞれの帰路に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7924t/>

プログラムコード-Utopia fantasy-

2011年10月8日19時16分発行